
とある多重は?5位！？

利波 雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある多重は？5位！？

【Zコード】

N1762BA

【作者名】

利波 雷

【あらすじ】

学園都市に住む少年こと龍崎紫電は念動力じゅうさき じでん テレキネシスと瞬間移動テレポートの多重能力者だった。彼を知る人間は、数少ない。（知ってる人は上条と土御門と小萌先生だけ（？）あと裏組織の研究者のみ 結構いる）それは自分が作り出したAIM拡散力場が原因で存在感が薄くなっているからだ。

基本原作基準です。チートはしないんで

ちょっと強引なところもありますが温かい目でみてください（ 、 、 ）

プロローグ（前書き）

初投稿です(、 、 、)ノ
誰かのパクつてたらすいません！
初心者なので温かい目でみてください
感想くれると嬉しいです！

プロローグ

始まるぞ！

『聞いているのですか？今日は一学期最後の日なのですよーそれに龍崎ちゃんはどうして学校に来ないのですか！？』

俺(じ)と龍崎紫電(りゅうざいしじでん)の日常はいつもこんな感じ（もう夕方の五時だけ

俺は家の中では普段白シャツにジーンズというラフな格好をしてい

る。シンシンと語りボサボサの頭をしていく。

電話の相手は月詠小萌(つきのよみこもえ)。身長135?なのに、教師といつある意味すごい先生だ。

「そんなこと言われてもね。外超怖いじゃん？」

携帯電話を片手に俺はベットの上で横になりながら適当(てきとう)に言葉を返す。

『龍崎ちゃんは多重能力者なので裏組織の研究者に狙われるの

然なのです』

当然と言わると結構傷つくな……。

先生の言う通り。俺は多重能力者だ。普通は一つもスキルを持つと脳がもたないのだが、俺の脳は一般人と比べ、構造が異なるらしい（らしいというのは先生に調べてもらつたからだ）。

「先生…多重能力者も大変なんですよ」

そう。俺はこのアンバランス極まりないこの能力が、正直鬱陶しい。

『大変つて…。先生に言われても困るのですよ～』

「てか、外で歩いてたら研究者達が襲いかかってくるんですよ」

『でも、すべて返り討ちって聞いてますよ?』

まあそなんだけどね。

俺の能力の一つは瞬間移動。テレポートさりげなく大能力者（レベル4）もう一つは念動力。テレキネシスこっちが超能力者（レベル5）。

二つもスキルがあると言つても全然いいことない。例えば、多重能力者だからと言つて二つも能力を使うと、頭が痛くなるし、体のほうも無駄にダメージを受けてしまう。そのため基本的には念動力しか使わない。さらに、自分が作り出したAIM拡散力場によつて存在感が薄くなっている。AIM拡散力場というのは、能力者達が無意識のうちに放っている力のことだ。ただの能力者にとっては特に何もないのだが、多重能力者になるといつた現象が起こるらしい。

『とにかく、明日から夏休みですけど、龍崎ちゃんは出席日数も足りてないので補習決定なのです！先生から以上なのですが、明日はちゃんときて下さい』

『えー？ちょっと待つて！こもッ』

ブチッと電話が切れる音がした。

「ベット……やられた

俺がベットにうつ伏せになつて寝るとグーっと腹の虫がなつた。
そういえば今日は昼食べてなかつた。

ベットから起き上がりつて愛用の黄色のパークーつきの服に着替え
る。額には「ゴーグル、首にはヘッドホン」というなんとも変わつた格
好で玄関に向かう。

「さて、夜の街に繰り出すぞー。」

まだ夕方だけどね。

プロローグ（後書き）

次回は、上条が逃げているところから
ヽ()ノ＝3＝3＝3
ここにくるまでかなり時間かかった
何回iPadおちるんだよ！

多重能力者（前書き）

頑張ります(、 、 、)ノ
てか、iPodでやるととにかく落ちますね。
感想待つます！

始めむやつぞ！

「……夜じゃなくて夕方だった」

勢いよく家を飛び出した矢先、外は真っ赤に染まっていた。

「パー カー 暑つ」

室内はエアコンをかけていたので気がつかなかつたが、外は思ったより暑かつた。

家の鍵を掛けていると、隣から「にゃー」や「だぜい」と聞こえてきた。土御門元春つちみがどもとしはるだ。今日は珍しく家にいるらしい。うちの隣は土御門。そのさらに隣が上条当麻かみじょうとうさまとなつてゐる。ちなみに、この家は奇跡的に裏組織の研究者にはばれていらない。上条みたいに不幸だったらと思つと正直ゾツとする。

「今日は何処に行こうかな」

テンションを上げるために独り言を言つが、結局いつものファミレスだらつ。

俺は裏組織の研究者に狙われているため近くに買い物も出来ない。この前も頑張つて買い物に挑戦したが、レジの待ち時間で黒ずくめの男がやってきたおかげで、あと一歩が届かなかつた。

階段を降りてマンションの前に立つ。そして、地面に手をついてゆっくりと顔を上げる。

「よーい……ドン！」

声がビルの谷間に木霊する。

細い裏道を抜けて一気に大きな道にでた。

どうして引きこもりがこんなに足が速いのかと言つと、ぶつちやけ
念動力^{テレキネシス}を使って少し浮いているからだ。（瞬間移動は太るから使わない）

完全下校時刻を過ぎているためバスも電車も止まっている。ここからファミレスまで徒歩30分。俺の速度であと10分といったところか。俺は一気にペースをあげて加速した。

「はあ……はあ……やつとついた」

現在の時間は7時ちょうど。

なぜこうなつてしまつたのかと言つと、また黒ずくめの男がやつてきて、全部倒していくからだ。

やつとの思いでファミレスにたどり着いた。

ファミレスに入ると、常盤台中学の制服をきた女子が見えた。こんなところでなにしてるんだか…。確か常盤台は門限があつて寮監が怖いと聞いたことがあるが。

まあ気にも仕方ない。俺は適当な場所に座る。

ピンポンピンポンと高い音がなり、集団の不良^{みたいな}が入ってきた。そし

て、なぜか↑割くらいがトイレに向かった。…なんで？

俺はとりあえず、苦瓜^{コーヤ}と蝸牛^{エスカルゴ}の地獄ラザニアを頼んだ。……なにこれ？

てか、わざわざから不思議なことばっかり起こるな。

後ろを向くと、さつきの常盤台中学の生徒が不良に絡まれていた。そこにシンシン頭の少年が割り込んでいた。

「その子。嫌がってるじゃないですか」

あつ。上条か…。相変わらずかつっこいね~。と言つことは、あの常盤台中学の子は学園都市第3位の超電磁砲か。

そんなことを思つていると、さつきトイレに向かつた不良が帰ってきた。

ドンマイ上条君！

上条は一田散に店を出でていった。そのあとを、不良と店員が追いかける。

「助けてあげますか」

ゆづくりと席を立ち上って出口に向かおうとする。あの超電磁砲が店を出たあと、入れ違いで黒ずくめの男が入ってきた。

「げつー?」

不覚にもつい大きな声を出してしまった。黒ずくめがひきり振り向く。

「いたゞーー！」ちだ

くつそー！無駄に堂々と動きやがって。

俺は念動力を使って超電磁砲の机にあるコップを先頭の黒ずくめの男にぶつける。

パリンと高い音が店内に響く。そのせいで、店内が一気にパーティクルになる。

そんなことを気にしている暇はない。俺はコップから出た水と氷を操り、目潰しに使う。

その隙に、スキルを瞬間移動^{テレポート}に切り替える。

こじで、俺の能力を説明しておこう。

まずは、瞬間移動^{テレポート}。この能力は、一般的な使い方と少し異なる。瞬間移動というのは、電気や炎を使う能力者とは、やり方が違う。電気よ！出ろ！と思つと出るのではなく3次元的な計算をしなくてはならない。しかし、俺の場合は俺の目だけに映る『赤い点』の位置に移動することができる。計算は必要なくなるが、逆に目に見えない場所に移動することは不可能だ。

念動力^{テレキネシス}は超万能な技だ。レベル5というだけあって、最高距離300m先まで操ることができ、重量はMAX1トンまでいける（やつたことないけど）。さらに特別なエリアを3つまで作ることができ、その場所の物は、たとえ地球の反対側にいても動かすことができる。

俺は店の外に飛び出して上を見て、また瞬間移動する。その時、視界の端に眩い光が映った。しかし今はそんなことを気にしている場合ではないので無視した。

そしてまた、能力を切り替える。

自分の体を空中に浮かせて、黒ずくめ達を見下ろす。何か無線機を話している。

黒ずくめが無線機から顔をあげてこちらを見てニヤリと笑う。

その時、バツシュと音がして後ろからミサイルが飛んでくる。

俺はミサイルを操って上に飛ばす。

下で黒ズくめが悔しそうにしている。もうまつでおいへ。

俺は能力を切り替えて、一気に家に帰った。

こつして慌ただしい夏休み初日は終わった。

家に帰るとあの電気が原因で電化製品が全滅しているとは……。

多重能力者（後書き）

次回は、神裂を出したい
長くなつてすいません

侍とシスター（前書き）

神裂だせた！

セヒシスター

は・じ・ま・る・ぞ

「暑い…」

7月20日。夏休み初日から気分は最悪。
電化製品が全て故障しているので、冷蔵庫の中身は全滅。エアコン
すら起動しない。

「はあーー」

ため息をついてボサボサの頭をかく。

ちなみに、家庭的スキルゼロで毎日の食生活がフアミレスといつ龍
崎にとりては、冷蔵庫の中身に関しては特に問題ない。
とにかく、少しでも涼しくしようと窓を開けたが、あまり意味はない。

ベットの上でふて寝しようとすると、電話がかかってきた。相手は
月詠小萌。内容は『わつわ、上條ちやんにも言つたのですが、今日
から補習なのでちやんと来るのですよー』と担任からの連絡網。

「わつやだーー」

夏休み初日から最悪だ！

そんなことを思つていると外から「はあーー？」と上條の声が聞こえた。
また不幸な日になつたのだろう。
もつ金てに關してやる気が起きない。そんなことを思つてこねる

また「ぎやああああああああ……！」という上条の悲鳴が聞こえ

てきた。あいつもあいつで不幸なんだろうな。

俺は自分の周りに念動力を結界のような感じで作り、そのまま寝た。

夕方。俺は目を覚ました。気がつくとパソコンの機能も回復していった。だが、俺が目を覚ました理由はエアコンが復活していたからではない。俺が作る念動力の結界に何かがぶつかった感じがしたからだ。

俺は今までに感じたことのない感覚に違和感を覚えた。風使い（エアロマスター）の攻撃？いいや、違う。そんな物理的な攻撃ではなく、何というか間接的な攻撃（？）だった。

「敵か！？」

とつとつとじこじこがバレてしまつたか？

俺は額にゴーグルをつけ首にヘッドホンをまく。これが俺の基本的な戦闘スタイルだ。

もう結界はやめている。なにも起きないとじこじこをみると、さつきの攻撃はもうしてこないのだろうか？

俺は念動力を使って遠くにある扉を開ける。

……誰もいない。

一瞬、動きを止めるが先手必勝と思い、瞬間移動テレポートで外に出る。

そこで見たものは、この平和な学園都市では見られないような残酷な景色だった。

廊下には、知らない女が二人。一人は身長が高く、Tシャツに片足だけ大胆に切つたジーンズという、露出率の高い服装だった。しかし、腰には2メートル以上の長さの日本刀を装備している。もう一

人が、シスター姿。年齢は13、14歳くらいだ。その背中からは、大量の血が流れ出ている。

「ツー？」

一瞬、思考が止まる。目の前で起きている現象に理解が追いつかない。

ただ、理解出来たのは、の方も信じられないという表情をしていたこと。

「はつ……！？」

女が俺の存在に気がつく。倒れた女を見る時ほどではないが、ありえないとも言いたげな顔だ。

「……なぜ一般人がここに？スタイルが人払いを済ませて置いたはずでは？」

女は静かに呟く。スタイル？人払い？何のことだ？科学用語でそんな言葉は聞いたことがない。

「見られてしまつたならば仕方ありません。あなたも消さなくてはならないので」

はあー？と言づ前に女が一気に距離を詰めてくる。
速い。距離は5メートル以上あるのに約0・5秒で距離をゼロにされた。そのまま刀を鞘にしまつたまま叩きつけてくる。

俺はたまたま倒れていた女を見ていたので、そのまま瞬間移動する。女に近寄つてまだ生きていることを確認する。息はある。
ここで戦うのも危険だと思い隣のビルの屋上へ瞬間移動する。

「テレポート…ですか」

女は普通のジャンプでこちまで飛び移ってきた。
人間離れとはまさにこのことだ。

「なんだよ。いきなり剣もつたお姉さんがきたと思ったら、チート
でも使つてるんですか？」

相手を探るために適当な言葉を投げかける。

「チート…その言葉の意味はわかりませんが、私は聖人です。あなたが戦つても勝てるはずがないので、諦めてくれるとこちらも助かります」

「諦める？」の状況でよく言つばー

「禁書目録の方はスタイルに任せましょう。貴方の相手は私です」

「いいぜ！聖人だろうが何だか知らねえし関係ねえー誰が相手でもやつてやるー学園都市ー5位の力を見せてやる！ー！」

俺はゴーグルとヘッドホンを田と耳につけた。

寺とシスター（後書き）

もつ氣がついてこると思いますが、さりげなく原作とリンクをせています。

2話で龍崎が頼んだものは実は上条が食べようとしていたものなんです。（わからない人は小説を見てみよ!）
これからもこんな感じで頑張っていきのうよろしくお願いします
感想待つてまーす（^ - ^）-

プロフィール（前書き）

今更プロフィール

プロフィール

主人公 龍崎紫電

身長 174?

体重 50キロ

血液型 O型

ボサボサヘアで額にゴーグルをつけて首にはヘッドホンをしている。

イメージ 一方通行の髪が黒くてボサボサヘア版(?)

普段は家で引きこもり。食事は一日1~2回(朝と昼は食べない。
というか食べれない)

家族構成 父 母 兄

兄は現在行方不明

ぶっちゃけキャラ崩壊していくかもしれない注意してください
(、 、 、)ノ

まだ知りたいことがあつたら聞いてください

プロフィール（後書き）

遅くなつてすいませんでした。o_r_n
今日は宿題の進み具合でもう一話書きたいです

聖人▽S1・5位（前書き）

理科の宿題やりながらの投稿（ 、 、 ）ノ

聖人 VS 1・5位

始まら……ない！

え！？（。 。 111）

（？？？）

神裂は少年の言葉に疑問を抱いていた。

（学園都市1・5位？どういうことでしょう？さつきから意味のわからないことばかり…この少年は頭でもおかしいのでしょうか？）

神裂はここに来る前に学園都市について少し調べておいたが、学園都市にレベル5は7人。小数点単位など存在しない…はずだ。それなのに、この少年は自分のことを『1・5位』と言った。ただのナルシストや自称、またはハッタリか…。だとしたら話は速い。…が、もし…万が一ハッタリではなかつたら？もう一度、魔法名など名乗りたくない神裂にとつてはとても厄介な相手となる。念には念を。神裂は力強く七天七宝と呼ばれる刀を握りしめた。

（聖人？成人？星人？セイジンって何？）

龍崎は女の言葉に疑問を抱いていた。

（セイジン？どうゆう意味だよ？さつきからわけのわからないことばっかり言つてやがる…電波系か？）

俺は一応レベル5なだけはあるので、そこそこ勉強はできる。しか

し、今まで学んだ中で『スタイル』や『人払い』など聞いたことがない。

それなのに女はそれが『ごく普通で当たり前のよう』に話していた。本当に電波系か…それともただのバカか…。このどちらかだと話は速い。

が、もし女が言っていることが本当だったら、自分の知らない世界を相手にしていることになる。そうなると、勝率は格段にかわる。念には念を。俺は女にばれないよう行動を始めた。

「どうして人払いが通用しなかったかは知りませんが…通用しないところとはそれ程の実力者ということですね」

いきなりの発言に俺は眉をひそめる。

「名前くらいは名乗るべきだと… そう言っているのです」
そういうことか。

「私の名前は神裂火織… 魔法名は名乗りたくないので」

またわけのわからない用語使いやがって。

「俺は龍崎紫電…学園都市1・5位だ！」

この言葉と同時に、戦いの火蓋が切つて落とされた。

俺は、屋上の扉とフェンスを**テレキネシス**で投げつける。

「七閃！」

投げものは全て居合ににより空中分解された。

?今の動き…何かがおかしい。

そう思つてゐる隙に神裂が距離を詰めてくる。

「七閃！」

また斬撃がくる。

俺は念動力で後ろビルに飛び、そこは、まだ作りかけのビルで鉄骨が沢山置かれている。

「逃げてばかりでは勝負になりません」

「かっ！逃げんのもこれで終わりだ！」

神裂もこつちに飛び移る。

着地する瞬間、一ひととばかりにビルの周りの鉄骨を投げつける。

「何度も同じです。七閃！」

またしても攻撃は届かない。だが…俺は鉄骨の後ろ側から走り込んでいた。居合に使う剣士なら剣が鞘から離れているつむ！

「なつ！？」

驚きの声が出る。ただし、神裂の口からでなく俺の口から。

(「なつ！？」鞘から刀を抜いていない！？)

「終わりです…」

神裂が上から刀を叩きつける。
叩きつけられる瞬間。

俺は笑っていた。

「気がついてんだよ……」

小さく咳いた瞬間。刀が叩きつけられる。
しかし、そこには誰もいない。

「なつー!? テレポートー! ?」

神裂が今度こそ驚きの声を上げる。

「やつぱりな。このワイヤーを使っていたのか」

俺はこの瞬間勝利はすぐそこだと思っていた。
しかし、神裂が床を破壊したことにより、一気にビルが崩れ落ちる。
俺はすぐにその場を離れる。しかし、その時俺は相手に背を向ける
とこう決定的な隙を見せてしまった。

「七閃ーーーー！」

「があーーー！」

空中でダメージを受けて、受身も取れないまま隣のビルの屋上に落
ちた。

(まづいーーーー)

俺は立ち上がりうつとするがうまく力が入らない。

「…………」

一気に追い詰められたも思つたが、神裂は俺が一番最初にいたビルを見ている。

「どうやら、スタイルが失敗したようですね」

神裂は一息ついて俺の方を向く。

「これより先は人払いが発動しませんね。貴方は命拾いしたようです」

そのまま神裂は何処かに飛んで行つた。

「ちくしょう……」

ちょうど雨も振り出した。今日は本当に最悪だ。

聖人VS1・5位（後書き）

神裂の口調がものすごく難しかった。
口調の勉強頑張りたいと思います。
感想待ってます(、 、)ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1762ba/>

とある多重は?5位！？

2012年1月5日22時52分発行